

ネパール北西部農村における権力構造—援助と教育による変化—

The Changing Power Structure in Northwestern Nepal: Foreign Aid and Education

1.0 はじめに

本論文ではネパール北西部農村における権力構造の変化について述べる。ネパールでは1990年の民主化以降、国全体に様々な形で開発が広まった。そのような政治的な変化が僻地農村にどのような変化をもたらしたのか、というのが本論文の問いである。1990年の民主化直後にはその変化についての論文が多く書かれたが、20年近くが経とうとしている現在は民主化や開発よりも民族運動やマオイストに関する論文が多く書かれている¹。確かに近年民族運動は勢いを増しているし、マオイストはネパールに大きな変化をもたらしたが、これらの事象は民族や地域や個人による差が大きく、全ての村で全ての人たちがこれらに関わっているわけではないし、立場により見方や受けた影響も大きく異なる。それよりも、実際に村で調査して直面するのは、1990年の民主化以降の政策の変化が、最も変化が少ないと考えられがちな僻地農村にまでも大きな影響を及ぼし、20年近い年月を経て村の人たち全体に劇的な変化をもたらしているということである。民主化や開発に伴う変化はネパール開国後、第二次大戦終了後から生じてきているが、1990年以前はそれらの影響の多くは都市部やその周辺、男性に限られ、僻地農村や女性にまで深く浸透するものではなかった。また、教育やNGOの政策は1990年の民主化直後から行われてきているが、直後に書かれた論文の多くは法や政策の変化についてであり、民主化と開発は直接関係ないものとされ、現在のような民主化と開発が重なる形では捉えられていなかったし、法や政策の変化が村にどのような影響をもたらしたのかについて書かれたものは少ない[Khadka 1993:49]。村全体の権力構造の変化は民主化直後には見られなかったものであり、時間を経て村の人たちの社会関係を根底から変化させるという形でもたらされてきている。よって、ここでは民主化後の政策の変化により開発が末端にまで広まり、そのことで生じた変化について、NGOの増加による変化と、教育の広まりによる変化という二つの変化に注目して論じる。「ネパールのどの村にも学校はあり、人類学者と先生と援助関係者が顔を合わせる」というフィッシャーの指摘[Fisher 1990:30]からわかるように、ネパール農村で近年生じている変化は、教育と援

助と深く関わっている。ネパールでは開発政策が行き届かず、電気や車道、灌漑などのインフラが普及していない村が少なくないが、そういった僻村であっても学校はあり、NGOが入っている。よって、NGOと教育の事例を述べながら、その中で仕事や自己や他者への認識の変化がどう生じたのか、そして村における権力構造がどのように変化したのかについて論じる。NGOで働くのは多くが男性であるため、前者は男性中心に生じている変化である。近年の教育の広まりは主に女性の間でみられる変化であるため、後者は女性中心に生じている変化である。これら二つを見ることで男性の中で起きている変化、女性の中で起きている変化両方をみる。

先行研究において、近年の権力構造の変化について論じられたものはいくつかある。C.シュレスタは、かつては民族やカースト、親族家族というコミュニティの中で仕事が行われてきたが、1990年以降一気に増加したNGOでは民族やカースト、親族家族とは別の社会関係のもと働くNGOという職場が出現し、権力構造が変化したことについて述べている [Heaton-Shrestha 2004,2006]。リムは旅行者の多いランタン地方で調査を行い、近年海外からの旅行者の増加により、村における権力が寺院などの宗教的な組織を中心とした権力構造から、裕福なホテルのオーナーへ移ったと述べている [Lim 2007]。

本研究はこれらの先行研究と重なる部分もある。共通点は以前のカースト、民族間関係に基づく権力関係が変化してきているという点である。しかし、異なる点もある。一番大きな違いは、民主化後の変化はあくまで村の文脈の中で解釈され、変化が生じているものであると考える点である。C.シュレスタもリムも、NGO職員や新たな権力者層をそれまでにない全く新しいものと考えている。本論文では、新たな権力者層がそれまでになかった全く新しい存在とは考えず、村の文脈の中でそれまでの権力関係が脅かされつつも異なる形で強化されていく動的かつ複雑な状態を描く。

1.1 調査村概要

ここでは、本論文を理解する上で必要な前提として調査村の概要を示す。調査村はネパール北西部に位置する標高約 1900m の村である。郡庁所在地のあるバザールまで徒歩 15 分、隣の郡まで開通した平野部まで続く車道の終点から約 100km、チベット国境までは徒歩 3、4 日の所に位置する。村にはヒンドゥ教のパルバテヒンドゥ（パハディ）²のハイカーストであるチェトリとタ

クリ³、ダリットのカミ、サルキ、ダマイが混住しているが、最上位のバフン（ブラフマン）や他の民族は住んでいない。チェトリとタクリが村の人口の大半を占めるドミナントカーストである。チェトリとタクリの多くは自給自足に近い農業を営みながら、政府関係機関やNGOの職員として、あるいは小規模の商店経営やラバでの運送業や建設業、ヤギの飼育やリンゴの栽培をして現金収入を得て生活している。チェトリはダリットよりも多く土地を所有する傾向にあり、自ら小農として自給自足的な農業を営んでいる家もあれば、ダリットや一部のチェトリを農業労働者として雇い、人手が足りない時に農業労働をさせる家もある。ダリットはカーストの仕事と小規模の農業を基本的な仕事とし、家庭によって大工や農業労働などを組み合わせて生計を立てている。カミは鍛冶屋仕事で主に金属製の農具の製作や修理をし、サルキはジャラライロ⁴の製作と修理、ダマイは儀礼での楽器の演奏をし、その見返りとしてチェトリが穀物や現金を払うというジャジマニ関係がある。ダマイはバザールや都市で売られる安価な中国製の既製の影で服の仕立ての仕事を失いつつあり、そういった形での変化はみられるが、近年のマオイスト支持者の増加による基本的なジャジマニという社会関係の変化はみられない。

1.2 カースト間の権力関係－権力を握るドミナントカースト－

村においてかつて支配的であったのはドミナントカーストに属する人たちであり、そこには浄不浄による上下関係が存在した。この関係は調査村の隣の郡において約 30 年前に調査を行ったベネットの研究から知ることができる[Bennett 1983:9]。このころ、ドミナントカーストは土地を比較的多く所有し、ダリットは土地を少なく所有する、という違いはあったが、どちらも生活を成り立たせる仕事は農業であり、必要に応じてカーストの仕事をするという形で生計がたてられていた。カーストが上である人たちが浄、ダリットは不浄であるという関係は言うまでもないが、かつては、外国人もこの浄不浄のカースト間関係の中で解釈されており、外国人は穢れたサル（醜い存在）でカーストでは下の存在として捉えられていた[Shrestha 1993:12]。

このころは現在のように多数のNGOはなく、オフィスワークの機会は政府関係機関に限られ、オフィスワークをする人たちは政府関係機関で働くごく一部の人のみであった⁵。オフィスワーカーはドミナントカーストの特定の親族で占められていた[Caplan 1972:50][Bista 1992:96]。この理由として

は、彼らがダリットに比べると教育レベルが高い傾向にあるという理由があげられるが、それ以上に「アフノマンチェ」の関係の中で就職が決まるためであった。ドミナントカーストは仕事を得たり進める上で、しばしば「アフノマンチェ」という言葉を口にする。アフノマンチェとは直訳すると「自分の（側の）人」となり、具体的には家族や親族、親しい友人などで自分自身をサポートしてくれる人を示す[Bista 1992:67][Bista 1992:98]。人々は相手がアフノマンチェかそうでないか、という二分をし、アフノマンチェであれば助け合うが、そうでなければだまし合う、希薄で搾取的な関係を持つ。人々はモラルや法律を守るのではなく、アフノマンチェであればどんなことでもサポートする、そうでなければ何もしない、あるいはだまし合うという関係性の中で生活しているため、アフノマンチェは生きていくうえで欠かせない存在である[Bista 1992:67]。アフノマンチェは助け合い、いい働きをすることや社会的に有利に仕事を進めることを約束し合う経済的生存戦略の一部である[Heaton-Shrestha 2004:44]。このアフノマンチェの関係は商取引においてもみられるが、政府関係機関の職員の間で特に強固なものである。ネパールではしばしば「汚職」が問題視されるが、この「汚職」もこのアフノマンチェの関係と密接な関係をもつ。「汚職」は具体的にはひいき主義、横領、賄賂の3つに分けられるが、これらはすべて親族家族を中心としたアフノマンチェの関係の中でのみ仕事やお金が回ることが原因となっている[Caplan 1971:267][Kondos1987:22]。ビスタはこのドミナントカーストのコネ社会について、ヒンドゥ教がネパールの経済成長の障害となっていると述べている。生まれで全てが決まってしまう、人々は全てを運命として諦めるしかなく、ドミナントカーストのコネ社会がそれを再生産しているのである[Bista 1992:161]。このビスタの主張に対してはたくさんの批判があるが、ドミナントカーストがアフノマンチェというコネにより権力を握りそれを再生産し続けるという構造についての説明はネパールの現状を的確に表したものだといえよう。ネパールにおいて、ドミナントカーストの政府関係機関の職員は社会的に上であると考えられてきた。それは、彼らがダリットと比較すると学歴があり、安定した現金収入があり比較的豊かであることもあるが、何よりも権力を握っているためである。そして、こういった権力関係は親族や家族などのアフノマンチェの間で再生産され、ドミナントカーストは権力を保持し続ける一方、ダリットはダリットに生まれたというだけでその権力構造の

下におかれ、そこから抜け出すことはできないのである。

1.3 NGOで働くー外国からの資金の流入により生じた権力者ー

村では近年NGOが増加し、そこで働く人たちが多くの現金収入を得て豊かになってきている。彼らは教育や裕福さという尺度で社会的に上位にあり、さらに権力ももつようになってきている。この変化を説明するためまず、NGO小史と現状、NGOでの仕事が「ラクな仕事」として捉えられているということについて述べる。NGOは、高給取りであり、コネがあり仕事その他の融通ができる、つまり権力があるため、NGOはラクで高給が得られ色々なことが思い通りになる理想的な職場として捉えられているのである。

NGO小史と現状

まず、村においてNGOがいつから存在しているのかについて簡単に振り返る。NGOの出現は調査村のみで生じたことではなく、ネパールの国全体で同時に起こったことであるため、ネパールにおけるNGO小史と、調査村のある郡や調査村でのNGOの状況両方を述べる。

この地域に限らず、ネパール全土においてNGOが設立されたのは、主に民主化した1990年以降である。それ以前もNGOはあったが、国全体で200団体程度であり、少なかった。パンチャヤート体制では市民活動は信頼されておらず一般的ではなかったためである[Yadama and Messerschmidt 2004:118]。しかし、1990年の民主化以降、NGOは増加の一途をたどり毎年千から2千団体前後が創設され、2009年現在では国全体で2万7千を超えている[Social Welfare Council 2009]。この背景には民主化により人々が社会に対する関心を持ち様々な望みを持つようになったこと、国際NGOの増加によりそのカウンターパートとしてのローカルNGOが必要とされたこと、給与の高いNGOでの勤務を望む人たちがいたことなどが挙げられる[Dhakal 2006:120]。調査村のある郡のみの団体数の推移についてのデータはないが、2009年までに郡内に100を超える団体が登録されている⁶[Social Welfare Council 2009]。ネパールの国全体として見ると都市やその周辺部にNGOが多く、首都カトマンズでは8千を超える団体が登録されていることと比較すると、調査村のある地域での団体数は少ない。しかしながら、都市部や平野部に集中的に行われるインフラ事業と異なり、僻地であってもNGOは存在

し、少ないながらも増加してきているということは特筆すべき点である。国全体の援助の額をみると予算の大半は二国間援助、あるいは多国間援助の形でネパール政府にもたらされ、それらは車道や橋など大規模なインフラ整備に使われる[マハラジャン 2005:26]。これらと比べるとNGOの予算は比べるに値しないほど小さい[New ERA 1997:11]。しかしながら、そういった大規模なインフラ整備が行われてこなかった僻地であってもNGOは存在し、社会関係に大きく影響を与える存在となってきているのである。これは、1990年の民主化時に、それまでの政府が受け手であった援助では末端にまで援助が届かないという反省から政府が社会開発を進める上でNGOをパートナーと認識し、NGOに力を与えて開発の届きにくい地域やコミュニティの開発を推し進めようとする政策を行ってきたことが反映された結果と言えよう[Seddon 1993:144][Blaikie et al. 2005:308]。

このようなNGO増加の流れの中で、NGOに関する研究もなされてきた。既に述べたように C.シュレスタはネパールのNGOにおいて調査をし、NGOではそれまでの政府関係機関でみられたようなドミナントカーストのアフノマンチェだけで占められた社会関係ではなく、カーストや民族、親族家族とは別の、何のコミュニティにも属さない、「人のために働く」新しい社会関係が作られているということを指摘している。本来、NGOは企業のように利益のために働くわけでもなく、政府のように政治のために働くのでもない、「良いこと」⁷をする新しい理想的な組織として考えられてきた[Fisher1997:442]。これは全世界に共通の認識であり、ネパールにおいても、C.シュレスタが調査を行ったような地域、NGOでは共有されている考え方のようなものである。しかしながら、調査村においてNGOの仕事は「人のために働く」「良いことをする」のではなく、給料をもらうため適当にやるものであり、都市や外国などのヘッドオフィスから来る指令に適当に従うだけのものである。

例えば調査村に住むチェトリのアラス・ラワル（33歳）はバザールにあるローカルNGOの職員として働いている。29歳の妻との間に娘3人（12歳、9歳、3歳）と息子1人（6か月）がいる。彼は外国人やヘッドオフィスの言うことに従い、別の村で「男女が平等に働くこと」や「女の子に家事をさせず学校に行かせること」などを指導に行っている。しかし、彼の子どもたちは一応近隣の公立の学校に通っているが、私立のボーディングスクールには通

っていない。NGOでの給与は高く、子供たちをボーディングスクールに行かせるだけの経済的余裕は充分にあるはずであるが、女の子なので行かせる必要性を感じていないようである。長女はかなり頻繁に母親の農作業を手伝わされており、母親が男の子を出産した後数カ月は、母親に代わって毎日農作業をしなくてはならず、その間ずっと学校に行けなかった。農作業を農業労働者を雇ってやらせるだけの経済的余裕はあり、実際父親自身が忙しく農作業ができない時は代わりに農業労働者を雇ってやらせている。しかし、長女に関してはそうは思わないらしく、数カ月の間学校に行けないことについては何の問題も感じていないようである。調査者が水汲みを女の子達だけがやっている理由を尋ねると、「一体何が悪いっていうんだ。子供はこれくらいの仕事しかできないからやらせているんだ」と半ば怒ったような口調で答えた。調査者は責めることを全く意図せずそういう口調でもなかったのだが、こういう答えが返ってきた。こういった態度をとる半面、自分のNGOのプロジェクトが終わり失職しそうになった時は、困ったような顔を作りながら「NGOを作って仕事をくれ」と何度も繰り返し言ってきた。このような彼の行動から、彼は自分が他の村で指導していることに納得しているわけではなく、NGOに雇用され、お金を得るために表面的に従っているだけということがわかる。また、彼にとって外国人やNGOのヘッドオフィスの言うことは「納得も共感もできない、現実離れした余計なこと」であるということを知ることができる。

彼のような姿勢—生活のために援助を利用しようとする姿勢—は頻繁にみられる。例えば外国人が環境問題があるといえ、それから突然環境問題があるということになり、そこに援助が来る。プロジェクトが失敗してこの問題が解決されなければ、更に外国から援助を絞ることができる[Shrestha 1993:20]。このようにして援助なしでは成り立たない、援助漬けの状態になり、外国人の作る政策やヘッドオフィスの言うことにこの地域のNGO職員が従い、プロジェクトを継続するために失敗するということが繰り返される。つまり、この地域におけるNGOは1990年以降に生じた新しい組織ではなく、単に高給の貰える雇用先として捉えられているのである。これは、ピグやナンダ・シュレスタの指摘に通じる[Pigg 1993:50][Shrestha 1993:15]。

権力を持つNGO職員の発生

NGOでの仕事はそれまでにあった政府関係機関の職員の仕事と同類として捉えられている。NGO職員の多くは都市の中流階級であり、地方で働く職員は村では裕福な家庭出身の者が多いということは、この地域にも当てはまる[Heaton-Shrestha 2004:43]。ネパールの他の地域にはFEDOやBASEのような一部例外もあるが、この地域ではNGO職員の多くはバフンやチェトリなどのドミナントカースト⁸であるという点もC.シュレスタの指摘と重なる[Heaton-Shrestha 2004:43]。ドミナントカーストであればNGOでの雇用が得られやすいという風に、ドミナントカーストが権力を保持する構造を再生産するという構造は政府関係機関もNGOも同じである。以前は浄と不浄という尺度による上下関係であり、それは現在もなくなっていないが、近年広まった教育、開発、という新たな尺度が加わり補強され、教育、開発があるドミナントカーストは上で、教育や開発がないダリットは下という社会関係が再生産されている。つまり、NGOが既にあったカースト間関係を再生産し、ドミナントカーストの「アフノマンチェ」によるコネ社会を継続し更に補強しているのである。確かにNGOは1990年代以降できた新しい組織である。しかし、NGOはあくまで村の文脈の中、コネ社会の中にあるものなのである。

NGO職員の仕事はしばしば「ラクな（サジロ）仕事」と言われている。ここでいう「ラクさ」とは、具体的には肉体労働ではないオフィスワークを指す。バフンなどのハイカーストで政府関係機関の上の地位で働く人はきつい肉体労働を嫌い避ける傾向というのは、近年のみならず、かなり前からあったと言われている[Shrestha 1993:11]。ハイカーストにとって体を動かして働くことはきつい、つらい（ドッカ）ことでしかなく、価値のない避けるべき仕事である。逆に体を動かさないオフィスワーク（ジャギレ）はラクな仕事であり理想的な仕事である。ハイカーストは自分で体を動かして働くことを恥ずかしいと感じ、下のカーストに命令してやらせる、仕事がうまくいかなければ反省するのではなく他を批判するという横柄な態度が自らの立場に適切であると考えている[Bista 1992:81]。近年、開発が広まってからは、教育のある人が社会的に上の立場にあると捉えられるようになり、彼らもハイカースト同様、きつい肉体労働を嫌い避けるようになった[Shrestha 1993:11]。本来自ら農作業をするチェトリでさえも、政府関係機関の上のポストにあるなどして社会的地位が高ければ、体を動かして働くことを避けようとするよ

うになっている。政府関係機関の仕事と類似しているNGO職員もまた「ラクな仕事」である。そのため、近年のNGOの増加によりNGOがラクな仕事で高収入をもたらす雇用先として期待されるようになり、「椅子に座っているだけでつらい思いをして働かなくても、コネさえあれば高給が得られる」という考え方がそれまで以上に広まったのである。この背景には、市場経済が十分に広まっておらず、時を惜しんで勤勉に働き、より多くの現金収入を得るという考え方が一般的ではないところに、突然外部から高収入が得られる雇用機会が与えられたという現状がある。NGOの資金源は外国から来る援助であるため、彼ら自身が努力し働いて利益を出す必要はないのである。それに加えて、オフィスワーカーは権力を持っているため働かないことに対しても問題視されない、という権力関係もある。つまり、権力があるために経済的にも力を持つドミナントカーストが存在し、コネによりそれが世代を超えて引き継がれていくのである。ナンダ・シュレスタの指摘通り、「開発は教育があり権力があり裕福な階級とそうでない階級を作り出す[Shrestha 1993:9]」のである。

近年のマオイスト支持者の増加は、こういった権力と経済力を併せ持つ人たちが再生産されていくことに対する不満から来るものであると思われる。ダリットや有力なアフノマンチェのネットワーク外にあるチェトリは、本人が努力をしたとしてもそれは報われず、有力なアフノマンチェのネットワーク内にいるチェトリが権力と経済力を思いのままにし、筋の通らない要求をしたり、権力による恩恵を受けているということに対して不満を抱いている。あるカミの男性は、本来9時～5時の大工仕事を7時～7時に強引に決められても同じ金額しか受け取れないと嘆く。これは、有力なチェトリが勤勉に働き高収入を得ている一部のダリットが経済力を持ち、自分たちを脅かすような存在にならないようにするためにやった行動と思われる。このチェトリは更に周囲にカミの仕事ぶりについての悪評を言ってまわり、評判を落とすことで経済力をつけさせないようにもしている。カミからすると勤勉に働いてもそれに見合うような収入が得られないこと、それが有力なチェトリによってなされていることは許し難いことである。そのためこのカミの男性はマオイストを支持し、ドミナントカーストが権力を握っている現状を変え、この不平等な状況を変えようとしている。NGOはそれまでの援助とは異なり、確かに僻地にも広まった。しかし、NGO自体が権力と経済力の再生産の装

置となり、その恩恵を得られない人との差は逆に広まった。そのため、恩恵にあずかれない村の人たちはNGOではなく、この権力関係を変えてくれるかもしれないマオイストを支持し、期待するのである。

1.4 教育と女性の序列化ー服装、「大変さ」と女性の仕事ー

次に女性が教育という指標で序列化しているということについて論じる。この序列は教育レベルに伴う仕事の違いからも生じており、服装がメタファーとなっている。要約すると、学歴があり、開発に従順で、服装はクルタで、オフィスワークなどの「ラクな仕事」をする女性と、学歴がなく、開発に従順でなく、服装はドティ（腰巻）で、農作業や重い荷を運ぶ「大変な仕事」をする女性とに二分されているということになる。この背景には近年の教育の広まりと、服装の変化、そして新たにオフィスワークをする女性が登場したという仕事の変化がある。よって、ここではまず教育政策の小史を見ていき、ネパール政府や援助機関の教育政策と、実際に生じている変化についての考察を行う。また、この現象に深く関係している服装の変化についても述べる。そして、それらの政策を受けて村で起こっている二分化や教育による序列化に対する反抗としてドティの女性たちが新たな言説を生み出しているという現状について述べる。

教育小史

ネパールで近代教育が始まったのは開国後の1951年以降である。それまではラナ政権下では教育の一般化は阻止されており、ラナ家の子供たちなどごく一部の人のみが近代教育を受けていた[長岡 2000:129]。これは、近代教育を一般化することで、ラナ政権の体制を揺るがす人材を作らないようにするためである[Levine 2006:22]。カトマンズやタライの都市周辺には少しばかりの学校が作られたが、北部や西部の農村においてはそれらはほぼ皆無だったといわれている[Bista 1958:101]。開国以前のネパールの識字率は2%に満たないものであり、小学校の就学率もわずか1%程度であった[長岡 2000:129]。1951年に開国してからは教育省設置、教育法制定などが行われ、近代教育が一般にも広められるようになった。1954年からはアメリカの援助も受け始めた[Onta 2000:4094]。開国直後は男子のみの教育をしている学校がほとんどであり、カーストもハイカーストに限られた[Levine 2006:22-23]。

しかし 1962 年に憲法ですべての人に教育の権利があることが制定され、さらに 1971-1976 年の新教育制度計画(The New Education System Plan:NESP) は男子と女子の教育機会を平等に与えることを明記したものであったため、教育の普及を大きく前進させた[Levine 2006:23]。NESP の目標は国家や王に忠実で、パンチャヤート体制に従う国民を作ることにあつた[Onta 2000:4094]。1980 年代には UNESCO の援助のもと、教育制度改革がなされた。80 年代以降の教育の目標はベーシックニーズを満たすことになった[Onta 2000:4094]。ここでは主に女子の就学率を上げるための取り組みがなされた。1990 年には民主化に伴い、教育が十分に広まっていない農村部やダリット、民族、女子全てに教育を広める努力がなされ始めた[Levine 2006:24]。これ以降、それまで学校のなかった僻地にも小学校と中学校が作られ始め、ネパール各地に国立トリブバン大学の分校も設置された。就学率を上げるために子供が学校に行く誘因となるように無料の軽食も配られるようになった[Levine 2006:25]。同時に、私立の小学校や中学校（通称ボーディングスクール）も作られはじめた。これらの学校は学費、制服代、教科書代などがかかり公立に比べるとお金がかかるが、比較的裕福な家庭では英語教育重視のこれらの学校へ子供を通わせるようになった[Levine 2006:25]。このような変化の中でネパールでは 1990 年代から初等教育の就学率は驚くほど向上し、男女差も縮まった[菅野 2008:4]。

調査村においても、ネパール全体とほぼ同じような変化が生じてきた。村での教育に関する資料は残っていないが、村の人たちの経歴を見ていくと、20 代以上だとチェトリの男性のみが教育を受けており、それ以下となるとダリットやチェトリの女性も教育を受けており、2009 年現在は 20 歳以下の子供のほとんどはほぼ毎日学校に通っているという状態である。バザールには数年前ボーディングスクールが 2 校でき、2008 年にはトリブバン大学の分校も開校し、村からそれらの学校に通うものもではじめている。国一番の僻地であらゆるインフラが欠如しているこの地域においても、学校教育は普及してきているのである。

教育の現状－教育による序列化－

ネパール農村において教育の広まりはどのような変化をもたらしたのであろうか。スキナーによると、ネパールにおいて学校とは非伝統的な考え方を

広め、アイデンティティを規定し、社会変化を推し進める力となるものである[Skinner 1990:14]。政府は学校教育を通して開発のレトリックを教え、それに従う子どもを評価し、進級させ、学歴をつけさせて職を与えることにより彼らが金と権力を持つようになることを通し、国全体をコントロールする[Skinner and Holland 1996:273]。つまり教育は開発政策に従う人材を作り出し、国全体をコントロールするために行われているものである。

ネパールにおける教育とは開発のレトリックを教え丸暗記させるものである。開発の目標がたとえ彼ら自身の生活の実感とはかけ離れたものであったとしても、エリートである彼らはひたすらその内容を暗証する。ナンダ・シュレスタの言葉を借りれば開発は西洋人のグル（宗教的指導者）からネパール人エリートに授けられた、物質的涅槃のためのマントラであり、エリートはこのマントラを唱える[Shrestha 1993:19]。例えば衛生的であることやヘルスポストを利用すること、植林をすること、家族計画をし子どもを少なく生むこと、トイレを作ることなどは「正しいこと」として国から指導されており、「教育のある人」は実際に自分たちの生活に必要なかどうかを考えず、ひたすらそれに従う[Skinner and Holland 1996:279]。これらの背景には「教育のある人」は「近代的であり」「開発されており」「科学的であり」「進歩的である」という見方があり、「教育のある人」は自分たちに必要か否か、本当に正しいかどうかを考えずに盲目的にこの価値に従う。そして逆に「教育のない人」は「伝統的」であり「迷信を信じ」、「保守的」であるとし、否定的に捉え、彼らを下位に見る[Skinner and Holland 1996:282]。よって、村では教育があり開発に従う人たちとそうでない人たちの序列が生じる。この開発による序列化の頂点には外国人がいる。外国人はかつてのカースト間関係における上下関係では「穢れたサル（醜い存在）」として下の存在と認識されていたが、開発の広まりにより、ネパールの中で開発（教育）のある人たちよりもさらに開発のある、最も上の存在として捉えられるようになったのである[Shrestha 1993:12]。

学歴のある人たち（主に男性達）は自分の社会的地位が高いと自覚して、そういった態度をとる。自ら農作業などの肉体労働をせず、農業労働者を雇って仕事をやらせる、という姿勢は、学歴があり社会的地位が高いと自覚する人がしばしば行う行為である。子供たちの間でも、学校に行った自分たちは行っていない親たちとは違うのだ、という意識がある[Skinner

1990:13][Shrestha 1993:10]。逆に教育のない人が少なくとも表面的には、教育のある人を尊敬したような態度をとることもある。確かに、1990 年以降、教育はそれまで教育が受けられなかった女性やダリットにも広まり、より多くの人が教育を受ける機会を得られるようになってきた。しかし、教育が広まることにより、「教育がある人」と「教育のない人」という立場の違いが生じ、序列化、二分化が生じているのである[Skinner and Holland 1996:274]。

二分化の背景としての教育と仕事

これまでは、全体としての教育による序列化について述べてきたが、特に村においては近年、女性の間での序列化と服装の変化という大きな変化が起こっているため、ここではこの女性の変化について述べる。女性の間では教育の有無により服装も仕事も異なる。これまで述べてきたように、男性の間では以前からある程度教育が広まっていたが、女性の間で広まったのは 90 年代以降であり、歴史が浅く、学校に行ったことがなく非識字の人と、学校に行つて上の学年まで進級した人、という大きな差が生じてきており、それに伴い仕事も異なるためである。男性にもある程度の序列はあるが、女性ほど明らかではない。男性は 40 代以上でも教育を受けたことのある人がおり、世代間の差は小さく、服装にもそれほど大きな違いはない。

なぜ、女性の中でのみ教育の有無による二分化が生じたのだろうか。この背景にはジェンダー分業や、父系の親族家族関係、男女の教育の違いがある。この村において多くの仕事が男性の仕事、女性の仕事という形でジェンダーごとに分けて行われている。これらの分類は村の中ではほぼ全員共通の認識であり、大抵男性は男性の仕事とされる仕事を、女性は女性の仕事とされる仕事をしている。子供もまた男の子は男性の仕事を、女の子は女性の仕事を手伝えることが多い。男の子は将来的にオフィスワークをするかカーストの仕事をするを期待されているため、ドミナントカーストであれば教育に投資し学校を優先させ家の手伝いはあまりさせない。ダリットであればカーストの仕事などを手伝わせて覚えさせる。一方、女の子はドミナントカーストもダリットも、10 代後半で嫁ぎ、嫁ぎ先の家では農業や家事などの労働力として期待されているため、学校教育は二の次であり、小さいころから家事や育児、農作業を手伝わせる。

父系であるため、女性が男性の家に嫁ぐという形での結婚がなされる。男

の子は基本的に実家に残り両親の老後の面倒をみるものと考えられているため、男の子への投資は惜しまない。女の子は男の子と違い、夫の家に嫁ぐのが普通であるため、女の子に投資して学歴をつけさせたとしても、そこで得られる収入は実家にはもたらされず、親には女の子に投資する誘因はない。女の子よりも男の子により良い教育を受けさせようとする考え方は通わせる学校にも反映されており、女の子が学校に行くようになった今も、一つの家族の中でも男の子はボーディングスクールに行かせるが女の子は公立学校に行かせる、という形で男女差は残っている。

こういった背景から、もともと女の子は学校に行かなかったが、近年国全体の流れと同様、この地域でも女の子も学校に行くようになりはじめ、教育を受けた女の子と受けていない女性たちという二分化が生じてきている。調査を行った2007年～2009年にはほとんどの女の子が学校に通っていたが、20歳前後だと学校に一度も行ったことがない人もおり、それより上の世代はほとんど全員が学校に通ったことがないという状態だった。年齢から計算すると、調査村においては約15年前の1990年代初頭から女性に教育が広まり始め、現在に至る女性の二分化の発端となったと思われる。両者は主に年代の違いからくる違いであり、家族や親族、カースト全てではっきりと階層化しているわけではない。同じ家族の中にも20歳の長女は学校に行ったことがないが18歳の次女は9年生で学んでいるといった風に、年齢や何番目に生まれたかなどで、教育を受けているかどうかが決まる。そして、この両者の間の一番大きな違いは、毎日農作業をするか、学校に行ったりオフィスワークをしたりするか、という仕事の違いである。オフィスワークをする女性たちは、農作業や家事などの仕事をしないわけではないが、基本的に毎日職場に通っている。一方、20歳前後でも学校に行ったことがない人がおり、20歳以上となるとほとんど全員が学校に行ったことがなく、毎日農作業や薪運びなどの肉体労働をしている。このように、教育の有無によって、女性たちが序列化、二分化してきているのである。

村には教育を受けている人、開発のある人は肉体労働せずオフィスワークをするが、教育を受けていない人、開発のない人は荷運びや農作業などの肉体労働をする、という図式があるが、これは調査村に限らず、他のネパール農村でも見られることである[Shrestha 1993:10]。開発が広まる前は、肉体労働はほとんど全員が小さいころからやる、当たり前の仕事だった。しかし、

開発が広まり、教育のある人とない人が生じ、オフィスワークをする教育を受けた人という存在が生じた。そして、それは開発や教育の有無による序列化と直接的に関係するため、オフィスワークをする人は教育（開発）があり上、荷運びなどの肉体労働をする人たちは教育（開発）がなく下、という風に序列化されて捉えられるようになったのである。「教育のある人」は軽い本を持っているのと対照的に、「教育のない人」は重い荷物を担いでいて大変であるというイメージはスキナーとホーランドがネパール中部で行った調査でも既に言われていることである[Skinner and Holland 1996:285]。pigも同様に「村の住民はカゴ(ドコ)で荷物を担いでいるイメージがある。荷物を担ぐということが村の生活の状態（額に汗する、苦勞が多い）を示す。ピカス（開発）があるところでは荷物を担がないと考えられていると述べている[Pigg 1992: 508]。このような教育（開発）により仕事も違う、という二分化は調査村に限らずに当てはまることであると思われる。

服装の変化—クルタとドティ—

ここまで述べてきた仕事と教育による序列化において、村では服装がメタファーになっている。ネパールにおいて服装とは民族やカーストを現すもので、相互の認識をはっきりと示すものである[Hepburn 2000:280]。村ではドティ、クルタが主に着られているがまれにサリーや洋服もみられる。ドティは、サリーと同じような大判の布で、腰に巻きつけて着る。途中まではサリーと同様の巻き方をするが、端を肩にはかけずに腰に巻きつけて着る。上にはチョロ（ブラウス）を着て、腰にはパトゥカ（細長い布）を巻く。これは、チェトリなどのパルバテヒンドゥーの服装であり、ネパール丘陵部では一般的な服装である[野口 1985:57]。都市よりも村で多く見られる[高山 1963:54-55][Hepburn 2000:289][南 2005:99]。調査村では主に既婚の大人の女性が着るものとされており、「教育のない」農作業などをして働く女性が着るものとも解釈されている。クルタスルワールは薄い布でクルタ（丈の長いチュニック）の下にスルワール（ズボンのようなもの）を着る。大人用のものには同じ布でショールがついていることもある。クルタスルワールについてはイスラム文明の流れを汲んだものであり、パンジャブ地方（インド及びパキスタン）からきた民族服がネパールにもちこまれたものであると言われている[松本 1985a:162][松本 1985b:18-19][南 2005:98]。カトマンズでは子

供や未婚の若い女性が着ていることが多い[南 2006:20]。調査村では学校で勉強をする女の子やオフィスワークなどをして働く「教育のある」女性が着るものとされており、実際にある程度の学歴のある人たちが着ている。子供達は公立でも私立でも制服を着て学校に行くが、家に戻るとクルタに着替える。制服があるのは10年生までで、それ以上の学年になると各自の私服のクルタを着ていくのが一般的である。また、オフィスワークをする学歴のある女性達は大抵クルタスルワールを着ている。南は「村にはクルター・スルワールを持っている女性は一人もいない[南 2005:99]」と述べていることから、この現象は比較的新しいものであると思われる。

女の子達がクルタスルワールを着る理由は「勉強するのに都合がいいから」と説明される。しかし、女の子たちに具体的にどのように都合が良いのか聞いてもはっきりとした答えは返ってこない。それは、この服がもともとパンジャブ地方の民族服であり、教育とは特に何の関係もなかったことから納得できる。クルタスルワールと学校教育が結び付けて考えられるようになったのは、「教育のある」学校の女の先生たちやオフィスワークをして働いている女性たちがクルタスルワールを着ているため、その影響で、教育がある人が着る服として考えられるようになったためと思われる。南が指摘しているように、かつて村にはなかったクルタスルワールは1960年代から開発プロジェクトに携わる女性たちによって着られるようになり、外国人ボランティアにも着られてきた[南 2005:98]。調査村においては開発プロジェクトに携わる女性は少なく、外国人ボランティアもいないが、女の先生や政府関係機関やNGOで働くオフィスワーカーなど、村外出身の教育レベルの高い人たちや、この村で生まれ育って10年生以上で学ぶ女の子たちによって着られている。対照的に学校に行ったことのない、農作業をする女性たちはドティを着ている。つまり、彼女らの服装は開発や学校教育のメタファーとなったのである。ネパールでは服装でその人の社会的地位や民族、カーストを認識しあう。この現象はそういったネパールに以前からあった傾向である。この認識の仕方の中に、クルタを着た学歴のある女性という新しい存在や、それと対照的なドティの女性という存在もが組み込まれ、新たな社会的地位とそれを表す服装が出現したのである。これは単に学校教育を受けたかどうかという事実のみならず、本人達の認識が反映されるのである。彼女たち自身の中で「教育のない」女性＝荷運びや農作業をする＝ドティなどを着ている、「教育のある」

女性＝オフィスワークをする＝クルタスルワールを着ている、と女性達自らが自分達を新しい「学校教育の有無」という尺度で二分し、それぞれが自らをそのどちらかであると認識しはじめたのである。

教育の広まりによって生じた変化－教育による序列化とメタファー－

教育はその有無で女性たちを序列化した。また、仕事も教育の有無との関係で決まるため、教育による仕事の序列も生じた。ドティとクルタという服装の違いは教育の有無のメタファーとなった。そして、教育がなく、重い荷物を担ぐ仕事をし、ドティを着ている女性と、教育があり、オフィスワークをし、クルタを着ている女性たちという二分化が生じた。「教育があり」、クルタをきてオフィスワークをする女性たちは「楽な仕事」をして高収入を得る人たちで、「教育がなく」農作業をする女性たちは「大変な仕事」をしてあまり収入が得られない人たちということになる。かつてはカーストの序列だけだったが、学校教育、クルタという新しい服装、NGOという新しい雇用先がこの地域にもたらされたため、こういった教育や仕事による新たな序列化が生じ、服装はそのメタファーとなったのである。

しかし、この序列化が全員にすんなりと受け入れられているわけではない。実際、クルタを着た人たちは、既に述べたように自分たちは「教育がある人」であり、社会的に上の立場にあると自負している。しかし、こういった状況があっても、ドティの女性達が学歴がなく、社会的地位も低い自分達をさげすむ姿勢はあまり見られない。普段の生活には文字の読み書きは必要なく、それよりも農作業がや家事ができるかどうかのほうが大切であり、嫁や母としての立場もそれらができれば十分に補償されるものである。また、一部の誇り高い女性達は、自ら新たな言説を作り出し、言い広めることで自分の立場の上昇を図っている。彼女たちは自分たちは「教育がない人」であることを認めながらも、下に見られたくないためか、「自分たちは「教育のある」都市の人や外国人ができないような重い荷運びができる」ということを自慢げに語る。この地域で生まれ育てば、車道がなく自動車などの重い荷を運ぶものがないために重い荷を運ぶ必要があり、重い荷が運べることは特別な技術ではなく、子供のころからやっていて誰でも出来ることである [Shrestha 2003:10]。また、重い荷を運ばなくてはならないということは車道などのインフラがないということであり、「開発がない」ということと同義である。こ

のことは開発を肯定的に見る「教育のある」人たちにはむしろ否定的にうつる。それにもかかわらず、彼女たちが「重い荷運びができる」ということを、あえて誇らしげに語り、「荷運びができない」外国人を見下そうとするのは、教育の有無により序列化が進み、自分たちがいつの間にか下の立場に置かれてしまったことへの抵抗なのではないかと考えられる。教育の有無による序列化、二分化が進む中で下位におかれてしまったドティの女性たちがそれを覆すために、特別なことではない荷運びを特別な能力のある人にしかできないように思わせるような言説を言い広め、抵抗しはじめたのである。しかし、彼女たちであっても開発言説を完全に排除して生活しているわけではない。「私は（都市の人や外国人にできないような）荷運びができる。」と誇らしげに語る中年の女性は、その一方で「自分の息子は開発のある都市のボーディングスクールで小さいころから教育を受けた。この村の他の子供たちよりも教育があるのだ。」と誇らしげに語る。この発言から、この女性は教育（開発）の有無の序列を完全に否定しているわけではなく、内面化もしているということがわかる。教育の有無による序列と、それに相反する重労働を特別な仕事として上に見ようとする序列という二つの尺度をその場その場で使い分けているのである。

1.5 権力構造の変化ーカーストから裕福さや教育の有無へー

これまでみてきたように、近年権力構造の変化が生じており、服装がそのメタファーとなっている。これは次の3つにまとめることができる。

- ① 大変な仕事とラクな仕事の二分化（教育による序列化）
- ② 教育がある仕事、いない仕事の二分化（教育による序列化）
- ③ お金が得られる仕事と得られない仕事の二分化（裕福さによる序列化）

現在の村では、これら3つの関係がそれまでのカースト間関係に加わり、新たな権力関係が生じている。コネの有無によるアフノマンチェの関係は以前から継続しているもので、マオイストは権力と金を掌握している人たち（主にドミナントカースト）を倒そうとしているが、政権が変わった現在でも完全に変わったわけではなく、2009年現在でも強く残っている。①~③についてはネパール開国後少しずつ広まり1990年の民主化で国の隅々にまで広まった、比較的新しいものである。かつてはカースト間関係だけだった状態から援助の広まりに伴いこれら新たな尺度が持ち込まれ、強い影響力を持つよ

うになってきている。例えば、ドミナントカーストで教育があり、NGOで働く（ラクな仕事をして高給を得る）という風に、これら全ての基準において上位にある人がその経済力と権力をアフノマンチェだけに与える、という風に、それまでの権力関係が更に補強される状況がある一方で、教育はあるがコネがなく収入が低いハイカーストや、教育はないがコネがありNGOで働くことで高給を得て経済的に上位にある家族、などそれまで見られなかった尺度で上位におかれるようになった人たちもおり、新たなヒエラルキーの指標が持ち込まれたことで交錯した権力関係がみられるようになってきているのである。実際のところ、教育の有無や服装や仕事の違いが明確な二分化という形で表れていないのではないかと、もっと複雑なのではないかという意見もあるかもしれない。しかし、仕事は特にドミナントカーストの中では大変かラクかの二分法で捉えられていて、それ以上の意味はないということは事実であるし、服装や教育についても少なくとも調査時は過渡期にあったためかなり明確な二分化が見られた。ただ、オフィスワークの機会が限られているため、今後教育がありクルタを着ているがオフィスワークに就けず農作業をする女性が出現する可能性は高く、こういった明確な二分化は見られなくなるであろう。

特筆すべきなのは、1990年に生じた民主化は機会や権利の平等を目指したものであり、NGOの増加や教育の普及もそれに伴う政策の変化から生じたものだったということである[Bista 1992:113]。本来機会や権利の平等を目指すものであった民主化が、20年近くを経て本来の目的を達成するというよりも逆に、収入や教育による格差の拡大、二分化を生じさせることとなったということは、おそらく1990年当時誰も想像できなかった結果であろう。マオイストはNGOが比較的恵まれたドミナントカーストの職員に限られ、彼ら自身に利益を与えているだけで本来の目的の達成をできていないとし、否定的である[Ulvila and Hossain 2002:155-156]。このようなNGOの現状が近年のマオイストの台頭の一因となっているのである。

最後に付け加えておきたいのは、これまでみてきた開発や教育による序列化とメタファーは、援助機関の尺度と似ているようで異なるものであるということである。援助機関において、教育やインフラ（重労働）の有無は貧困の尺度となっているものである。そして、これらの貧困を解消するために開発が必要だといわれる。しかし、興味深いのは、村の人たちの中では開発と

貧困は全く別のものであるという点である。援助機関の言説とは異なり、村の人たちの中では開発は現実離れした、外部から一方的に定められる目標のようなものである。開発はあったほうが「理想的」であるが、なくても十分に生きていける。つまり開発が不足しているから貧困であるという考え方は全くなされていない。村の人たちの中では開発がなくても生きていけるが、序列化がなされているため、社会的に下の立場におかれてしまうという認識がなされている。村において貧富は開発の有無というよりも、土地、現金収入、労働力やコネの有無でまざるものである。つまり、村においては「開発がないこと＝社会的に低い立場にあること」であるが、「開発がないこと≠貧困」なのである。

例えばゴリカラ・ラワル（推定年齢 35 歳）とシタデビ・ラワル（推定年齢 36 歳）はどちらも学校に行ったことがなく非識字であり、夫はどちらも数年前別の女性の所へいなくなり、そこからの現金収入も得られなくなった。ゴリカラ・ラワルには娘 3 人（20 歳、18 歳、10 歳）がおり、長女の夫（20 歳）とその息子（2 歳）と同居しているが、長女は非識字で母親の農作業を手伝っており、他の娘たちや婿は皆学生で収入はない。シタデビ・ラワルには娘 1 人（23 歳）と息子 2 人（20 歳、18 歳）がいるが、娘は平野部に嫁ぎ、息子 2 人は父親の経済援助の下、都市の寄宿舎付きの学校に通っており、普段村にはいない。つまり、この 2 家族は教育もないし NGO も関係していない 2 家族である。これは開発言説から言えば、開発がなく貧困に違いないという状態である。しかしながら、この 2 家族は夫が残していった 1ha 弱の畑で母や娘たちが農作業をし、食料を自給し、リンゴや穀物を栽培し売ることによって現金収入を得ている。この二人の女性は学校に行ったことがないが、どちらも子供のころから農作業を手伝ってきたので、農作業に関する知識や経験はあり、何の問題もなく働くことができる。確かに夫がいたころに比べると現金収入は減り、家計は厳しくなった。農作業やマキ運びなどは骨が折れる大変な仕事だとも言う。しかし、食料は足りているし、現金収入は少ないがぎりぎり足りており、借金をすることも誰に頼ることもなく生活は成り立っている。トイレや水道などのインフラはないが、それは現金収入の多い家と同様に積極的に欲しがる態度は見せず、NGO の支援でトイレを建てようとしたが途中で止めたり、鍵をかけてほとんど使わないという状態である。本人たちは夫がいたころよりは家計が厳しくなったことは認めているが、自分

たちが貧しいとは思っていない。それは周囲も同様で、確かにサラリーマンがいる家庭に比べると現金収入は少ないものの、農業をすることで「質素だが満足できる程度に暮らしている」と認識している。他に男性がいる家庭でも学歴やコネがないためNGOや政府関係機関での就職先が見つからず、農業と羊飼いやラバでの荷運びや大工、鍛冶屋などをして生計を立てている家族も少なからず存在するが、これらの家族も貧しいと認識してもされてもいない。つまり、NGOと関係なく教育がなくとも、一定の土地があり、そこで農作業をして食料を得て、何かしらの副業で現金収入を得れば生活に困らない、ラクでも豊かでもないが「質素だが満足できる程度に暮らしていける」という考え方は村の多くの人が共有しているのである。彼らにとって開発（NGOや教育）はあるとよりラクに、豊かになれ、社会的に上位にたてるものではあるが、ないからといってどうしようもなく困るものではないのである。しばしば、マオイストは貧困のために生じたということが言われるが[小倉2007:99]、それについても同様のことが言える。マオイストは「貧困から抜け出すため」ではなく「不平等を是正するため」に生じたのであり、コネがないことで抑圧された状態－「ラク」で現金収入の多い政府関係機関やNGOの仕事に就けない、不当な値切りをされる、化学肥料や援助米などが得られない状態－から抜け出せず、格差が縮まらないという不平等に対する怒りから生じたものなのである。

註

¹ 例えば David Gellner and K. Hachhethu ed. 2008 "Local Democracy in South Asia: The Micropolitics of Democratization in Nepal and its Neighbours." や David Gellner ed. 2003 "Resistance and the State: Nepalese Experiences." など。

² パルバテヒンドゥ (パハディ) とはヒンドゥー教徒でネパール語を母語とし、ネパール全体で多数派を占める民族である。旧王室や政府関係者に多く、他の民族よりも支配的な地位を占めている[ビスタ 1982:1]

³ チェトリとタクリはどちらもハイカーストでクシャトリアにあたる。両者の違いは諸説あり明らかでない[ビスタ 1982:25]

⁴ 木製の農具。木の細い棒を並べて水牛の革の紐で結び合わせたもので、シコクビエの脱穀に使用する。水牛の革を使っているため、この製作がサルキの仕事となっている。

⁵ 隣の郡で調査をしていたベネットの民族誌の中にはNGOは全く登場しないこと、また後述するように1990年以前はネパール全体としてNGOが少数しか存在しなかったことから、このころNGOがほとんどなく、そこで働く人たちもほとんどいなかったということがうかがい知れる。

⁶ Social Welfare Council (以下 SWC) によると、ここでのデータは SWC で登録した団体に限られる。よって、登録していないが何らかの活動をしている団体がある可能性もある (例えば国際NGOがその地域のローカル NGO と提携を結ばずに、短期にその郡を訪問するという形で活動を行っていたとすれば、そのことはその地域の人には認知されていたとしても、SWC の記録には残らないということとなる。) また、登録したがそれ以降活動を停止、休止した状態にある団体も多数存在すると言われている。しかし、活動を停止、休止したとしてもそのことを申し出る義務はないため、SWC がそれを把握することは難しく、実際に活動を続けている団体がどのくらいあるのかについてを知ることは難しい。NGOはできては消えていく団体が多く、それらを把握しきれないということは SWC に限った問題ではないため、NGOについてのデータを完全に把握することは不可能である。そのため、ここであげるデータは完全なものではない。

⁷ NGOが「良いこと」とすることは、ある人にとっては良いことかもしれないが、他の人にとっては害があることである可能性もあり、必ずしも良いことではないという指摘、つまりNGOが独善的になる可能性の指摘は既になされている[Fisher 1997:442]。

⁸ C.シュレスタはドミナントカーストに加え、ネワールも多いと書いているが、ネワールはカトマンズ周辺に多い民族であり、調査地周辺ではほとんど見られず、そのためNGOで働く人もほとんどいない。

参考文献表

Bennett, L., 1983, *Dangerous Wives and Sacred Sisters*, Columbia University Press, New York.

ビスタ, D.B., 田村真知子 (訳) 1983, 『ネパールの人びと』, 古今書院.

Bista, D.B. 1958, "Education Problems in the Northern Border Area of Nepal", *Education Quarterly*, 2(3), pp. 98-102.

_____. 1992, *Fatalism and Development*, Orient Longman, Hyderabad.

Blaikie, P.M., Cameron, J.& Seddon, D. 2005, *Nepal in Crisis*, Clarendon Press; Oxford University Press, Oxford; New York.

文化学園服飾博物館, 2001, 『世界の伝統服飾』, 文化出版局.

Butterworth, B. 1990, "Social Change and Educational Relation in Nepal: Reflections from an Educational Development Perspective", *Himalayan Research Bulletin*, 10(2/3) pp. 35-36.

Caplan, L. 1971, "Cash and Kind: Two Media of 'Bribery' in Nepal", *Man*, 6(2), pp. 266-278.

Caplan, A.P. 1972, *Priests and Cobblers*, Mandala Publications, Kathmandu.

Dhakal, T.N. 2006, *NGOs in Livelihood Improvement : Nepalese Experience*, Adroit Publishers, New Delhi.

Fisher, J.F. 1990, "Education and Social Change in Nepal: An Anthropologist's Assessment", *Himalayan Research Bulletin*, 10(2/3), pp. 30-34.

Fisher, W.F. 1997, "Doing Good? The Politics and Antipolitics of NGO Practices", *Annual Review of Anthropology*, 26, pp. 439-464.

Heaton-Shrestha, C. 2006, ""They can't Mix Like We Can": Bracketing Differences and the Professionalization of NGOs in Nepal" in D. Lewis & D. Mosse (eds.) *Development Brokers and Translators: the Ethnography of Aid and Agencies*, Kumarian Press, Bloomfield, CT, pp. 195-216.

_____. 2004, "The Ambiguities of Practising Jat in 1990s Nepal: Elites, Caste and Everyday Life in development NGOs", *South Asia: Journal of South Asian Studies*, 27 (1), pp. 39-63.

Hepburn, S., 2000, "The Cloth of Barbaric Pagans: Tourism, Identity, and Modernity in Nepal", *Fashion Theory*, 4 pp.275-300.

Holland, D.C. 1998, *Identity and Agency in Cultural Worlds*, Harvard University Press, Cambridge, Mass.

Holland, D.C. & Skinner, D.G. 1995, "Contested Ritual, Contested Femininities: (Re) Forming Self and Society in a Nepali Women's Festival", *American Ethnologist*, 22(2), pp. 279-305.

_____. 1997, "The Co-development of Identity, Agency, and Lived World" in J. Tudge, M.J. Shanahan & J. (eds.) *Comparisons in human development*, Valsiner, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 193-221.

_____. 1996, "Schools and the Cultural Production of the Educated Person in a Nepalese Hill Community" in B.A. Levinson , D.E. Foley & D.C. Holland (eds.) *The Cultural Production of the Educated Person*, State University of New York Press, Albany, NY, pp. 273-299.

_____. 2008, "Literacies of Distinction: (Dis)Empowerment in Social Movements", *Journal of Development Studies*, 44(6), pp. 849-862.

菅野琴, 2008, 「ネパールにおける女子の基礎教育参加の課題 : ジェンダーの視点から」, 『ジェンダー研究 : お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』, 11, 1-21 頁.

- Khadka, N. 1993, "Democracy and Development in Nepal: Prospects and Challenges", *Pacific Affairs*, 66(1), pp. 44-71.
- Khan, S.R. 1993, "South Asia" in E.M. King & M.A. Hill (eds.), *Women's Education in Developing Countries: Barriers, Benefits, and Policies*, Published for the World Bank [by] the Johns Hopkins University Press, Baltimore, pp. 211-246.
- Kondos, A. 1987, "The Question of "Corruption" in Nepal", *Mankind: official Journal of the Anthropological Society of Australia*, 17(1), pp. 15-29.
- LeVine, S. 2006, "Getting in, Dropping out, and Staying on: Determinants of Girls' School Attendance in the Kathmandu Valley of Nepal", *Anthropology & Education Quarterly*, 37(1), pp. 21-41.
- Lim, F.K.G. 2008, "Of Reverie and Emplacement: Spatial Imaginings and Tourism Encounters in Nepal Himalaya", *Inter-Asia Cultural Studies*, 9(3), pp. 375-394.
- Lim, F.K.G. 2008, *Imagining the Good Life: Negotiating Culture and Development in Nepal Himalaya*, Brill, Leiden; Boston.
- Lim, F.K.G. 2007, "Hotels as Sites of Power: Tourism, Status, and Politics in Nepal Himalaya", *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, 13(3), pp. 721-738.
- マハラジャン・ケシャブ・ラル, 2005, 「現代経済：高外国依存の低開発状況からの脱出が可能か」, 『流動するネパール』, 石井溥編, 東京大学出版会, 19-45 頁.
- 松本敏子, 1977, 「ネパールの民族衣裳」, 『衣生活研究』, 4(2), 56-63 頁.
- _____, 1985-a, 『衿の発生と発展』, 関西衣生活研究会.
- _____, 1985-b, 「世界の民族服」, 『衣生活研究』, 12 (2), 14-19 頁.
- 南真木人, 2005, 「クルター・スルワールの流行とその含意ーネパールのファッションー」, 杉本良男・三尾稔・国立民族学博物館編, 『装うインド』, 千里文化財団, 98-99 頁.

_____, 2006, 「ネパール」MCD プロジェクト編, 『国際理解に役立つ民族衣装絵事典』, PHP 研究所、18-21 頁.

長岡智寿子. 2000, 「ネパールの教育開発についての一考察—Non-Formal 教育の事例を中心に—」, 『ヒマラヤ学誌』, 7, 127-142 頁.

New ERA, 1997, *A Study of Foreign Assistance in Nepal*, New ERA, Kathmandu

野口文子, 1985, 「ヒマラヤの民族衣装 1」, 『衣生活』, 260, 61-65 頁.

_____, 1985, 「ヒマラヤの民族衣装 2」, 『衣生活』, 261, 55-58 頁.

小倉清子, 2007, 『ネパール王制解体』, 日本放送出版協会.

Onta, P. 2000, "Education: Finding a Ray of Hope", *Economic and Political Weekly*, 35(47), pp. 4093-4096.

Pigg, S.L. 1992, "Inventing Social Categories through Place: Social Representations and Development in Nepal", *Comparative Studies in Society and History*, 34(3), pp. 491-513.

Seddon, D. 1993, *Nepal: A State of Poverty*, Vikas Pub. House, New Delhi.

Shrestha, N.R. 1993, "Enchanted by the Mantra of Bikas: A Self-Reflective Perspective on Nepalese Elites and Development", *South Asia Bulletin*, 13(1/2), pp. 5-22.

Skinner, D. 1990, "Nepalese Children's Construction of Identities in and around Formal Schooling", *Himalayan Research Bulletin*, 10(2/3), pp. 8-17.

Skinner, D., Pach, A., & Holland, D.C. 1998, *Selves in Time and Place: Identities, Experience, and History in Nepal*, Rowman & Littlefield, Lanham, Md.

Skinner, D. & Holland, D. 1996, "Schools and the Cultural Production of the Educated Person in a Nepalese Hill Community" in B.A. Levinson, D.E. Foley

& D.C. Holland (eds.) *The Cultural Production of the Educated Person*, State University of New York Press, Albany, NY, pp. 273-299.

Skinner, D., Holland, D. & Adhikari, G.B. 1994, "The Songs of Tij: A Genre of Critical Commentary for Women in Nepal", *Asian Folklore Studies*, 53(2), pp. 259-305.

Social Welfare Council, N. 2009, *Social Welfare Council, Nepal*. Available: <http://www.swc.org.np/> [2011, 0114] .

高山龍三, 1963, 「ヒマラヤ・チベットの衣服」, 『被服文化』, 84 ,54-60 頁.

Ulvila, M. & Hossain, F. 2002, "Development NGOs and Political Participation of the Poor in Bangladesh and Nepal", *Voluntas: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, 13(2), pp. 149-163.

Yadama, G.N. & Messerschmidt, D. 2004, "Civic Service in South Asia: A Case Study of Nepal", *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 33(4), pp. 98-126.

日本語要旨

本論文ではネパール北西部農村における権力構造の変化について述べる。ネパールの1990年の民主化による政策の変化が村にどのような変化をもたらしたのか、というのが本論文の問いである。特に本論文では1990年以降のNGOと教育の広まりに着目する。村においてNGOは主に男性の雇用先として捉えられ、「教育があり、裕福で権力を握る」一部のドミナントカーストがNGOで働くことで彼らとそれ以外の人達という序列が生じた。また、教育の広まりにより、学校教育を受けた女性と受けていない女性という序列が生じた。教育は仕事や服装とも深い関わりを持ち、「教育のある女性＝オフィスワーク＝クルタ」「教育のない女性＝重労働＝ドティ」という認識が広まった。村では①大変な仕事とラクな仕事、②教育がいる仕事といらぬ仕事、③お金が得られる仕事と得られない仕事の3つの序列がそれまでの浄不浄の序列と重なり、交錯した権力関係が生じてきている。

英語要旨

This article examines the changing power structure in north-western Nepal. I attempt to explain the influence of the political reforms after the introduction of democracy in 1990 by considering the case of a remote village. In particular, I focus on the proliferation of NGOs and the spread of education. Since 1990, NGOs have proliferated through Nepal. In the village studied, NGOs are regarded as exclusively male workplaces. Some “educated and powerful” dominant caste men work there. And they have thus become rich. This situation created a new hierarchy. The new policy offered women educational opportunities, thereby creating another new hierarchy: “educated women” and “illiterate women.” Moreover, education is related to work and attire. Villagers think “educated women = office work = “kurta” and “illiterate women = physically demanding work = dhoti.” Thus, in the village, new hierarchies are created: (1) hard work and easy work, (2) educated workers and illiterate workers, (3) highly paid jobs and badly paid jobs. Hence, when the above hierarchies are integrated with the caste-based hierarchy, a complicated power structure can be observed.